キズナエピソード

遊部 いろは　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

いつしか俺たちは毎日のように連絡を取り合って、

街に繰り出すようになっていた。

もちろん、会うときは俺といろは、花織の３人揃ってなのだが。

ある日、突然花織からこんな着信が届いた。

「ごめん！　予定が入って、背徳のカップケーキ

　食べに行けなくなっちゃった」

リベンジ・カップケーキ！　と一人で意気込んでたくせに、

その当人が行けなくなってしまった、との連絡だ。

//次ページ

となると、今日は俺といろはの2人きり……。

……これはちょっと、気まずい。

しかも、カップケーキを食べる、という名目がなくなった今、

俺といろはが2人でいる理由もなくなっていた。

//次ページ

いろはからの連絡を待つのは嫌だった。

いろはならば、

「――カオリンいないし、また今度にしよっか？」

と邪気もなく言うだろう。

だが俺は今日、いろはと会うことを楽しみにしていたのだ。

//次ページ

たしか、いろはは水泳部のヘルプに出ると言ってたな。

今頃、まだ泳いでいる時間だろうか……。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//プールサイド

［いろは］

「やばっ、楽しくて泳ぎすぎちゃった！

もう誰もいな……」

［いろは］

「あれっ？　とびお、なんでー？

渋谷で待ち合わせじゃないっけ？」

［とびお］

「いや……花織、行けなくなったって言うから」

［いろは］

「あ、うん、カオリン昨日スイアヴァ行って

食べ過ぎで

胸焼けしちゃったんだって！」

［いろは］

「『ウチ、胸焼けする胸ないけどね！』

って自虐ネタ言ってた！」

［とびお］

「慣れたもんだな、花織も……」

［とびお］

「でも、なんだ。

渋谷に行くつもりだったのか？」

［いろは］

「えっ、なんで？　当然だよ！

とびおと二人で話したりとかもしてみたかったし！」

［とびお］

「そ、そっか……」

［いろは］

「あはは。変なとびお！」

［とびお］

そう言って笑ういろはの顔は、とても眩しかった。

［とびお］

「そういやさ……お前に、

ずっと聞きたかったことがあるんだ」

［いろは］

「うん？　なになに？」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

蝉の声がけたたましい。

いろははプールの縁に腰掛けて、両足を水の中に浸からせた。

「いろははさ……」

聞くなら今だ。

好きな人はいるか。

俺のことを、どう思ってるか。

絶対今、聞くべきだ！

//次ページ

「いろはは、なっ、なんで、助けんの……」

あっちゃぁー……。

俺、情けねえ。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［いろは］

「えっ？　なに？」

［とびお］

「いや、なんで他人のこと、

あんなに助けようとすんのかなって」

［いろは］

「……トイレ開けたら5分でドカン」

［とびお］

「は、はい？」

［いろは］

「あのね、トイレで変身した魔法少女が、

5分間だけ色んな魔法を使えるっていうアニメ。

知らない？」

［とびお］

「なんか色々ひどいな、そのアニメ」

［いろは］

「ひどくないよ！　すごいんだよ！

たった5分で、みんなを不幸のどん底から

幸せな場所へ引っ張っていくの」

［いろは］

「10年間苦しみ続けた人も、

たったの5分で笑顔に変わっていくんだ！

すごく魔法、って感じするでしょ？」

［とびお］

「いやそれは……ただのご都合主義だろ」

［いろは］

「む～～、そうかもだけど、

すべての人の笑顔が、その魔法少女にとって、

あたしにとって、力になるの」

［いろは］

「だから、あたしも助けたいんだ。

それが自分のわがままなのは、

わかってるつもりだけどね……」

［とびお］

「いや、でも、その……。

それは俺も少し、わかるよ」

［いろは］

「とびおも、みんなには笑っててほしい？」

［とびお］

「みんな、じゃなくて。お前……。」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

「あたし……？」

「……俺も、お前に笑顔でいてほしいって思う。

　それはさ、俺のわがままだよな」

いろはは目を丸くさせて、俺を見つめた。

間もなく、固まった表情はふにゃりと笑顔に変わり、

その緩んだ頬はそこはかとなく赤みを帯びていた。

//次ページ

「ううん。とびおのわがまま、嬉しいよ……」

まだ、いろはは俺を見ている。

俺もいろはを見ている。

言葉が何も、浮かばない。

だって俺は今、会話なんかより、こいつと……。

//次ページ

少し顔を近づけてみる。

見上げたいろはの瞳が、不思議そうに揺れた。

俺はいろはの唇に、自分のそれを重ね合わせた。息が止まる。

ほどなくして、唇を離した。

いろはの瞳には驚きが宿っていた。

「と、とびお。今のって、何……？」

「……これも、俺の、わがまま」

//次ページ

恐る恐る自分の身体を離すと、

いろはは追いかけるように俺の腕を掴んだ。

「じゃあ、これは、あたしのわがまま……」

いろははぎゅっと目を閉じ、俺に押し付けるようなキスをした。

いろはの呼吸が流れ込んでくる。

全身の熱がすべて、いろはと触れている場所に集まってゆく。

……わがままの押し付け合いが、こんなに心地良いなんて。

いろはの感触と蝉の声だけが、俺を埋め尽くしていた。

//【R18版の場合、ここに挿入】

//ヴィジュアルノベル形式終了

//3話END